28

再読 関西近代建築
―モダンエイジの建築遺産―
生駒ビルヂング

酒井 一光

所在地／大阪市中央区平野町2―2―12
設計／宗建築事務所
施工／大林組
竣工／昭和5年
構造／鉄筋コンクリート造
規模／地上5階、地下1階
種別／ビルディング

生駒ビルヂングは、株式取引所（現・大阪証券取引所）や金融機関、百貨店などが集まっていた近代大阪のメインストリート堺筋と、古くから栄えていた平野町通の交差点南西角に、昭和5年（1930）に竣工した。そして、いまも昔と変わらぬ姿をみせている。

生駒ビルヂングの竣工記事は、本誌13輯11号（昭和5年10月）に「株式会社生駒時計店本店」の名で掲載された。生駒時計店は明治3年（1870）に現在の中央区高麗橋4丁目に創業、後に高麗橋5丁目に移転した。御堂筋拡幅に伴い、昭和3年に店舗を立ち退き、新たな本店ビルを建設したのが現在の生駒ビルヂングであった。

同竣工記事は、戦前期の関西建築界の黄金時代を紹介した本誌連載「京阪神新建築集」の記事中で3ページ余りであるが、竣工写真、立面・平面・断面図、工事概要が掲載され、同号の中でも目を引く存在だった。設計を手がけた宗建築事務所の宗兵蔵は、日本建築協会の前身・関西建築協会の時代から副会頭（1921～26年度）、副会長（1927～35年度）も務めた人物であったから、彼の事務所の作品が採り上げられたのもうなずけるが、なにより本建築の作品としての質の高さが読者の目をひく要因となったのだろう。モダニズムの最先端を行くというよりも、アール・デコの“モダン”な雰囲気を存分に発揮し、当時のクライアントの心を満たしたものであったのだろう。今日でもその評価は変わることなく、大阪の近代建築のシンボルとして不動の人気を博している。

■流行を体現したファサード

生駒ビルヂングは、鉄筋コンクリート造地下1階地上5階塔屋付で、平面形状は堺筋と平野町の交差点に面する部分を正面に向けることから、およそ五角形をしている。五角形の形状は、だいぶプロポーションは異なるものの、生駒時計店の商標である駒の中に「生」の文字をあしらったマークとも共通している。

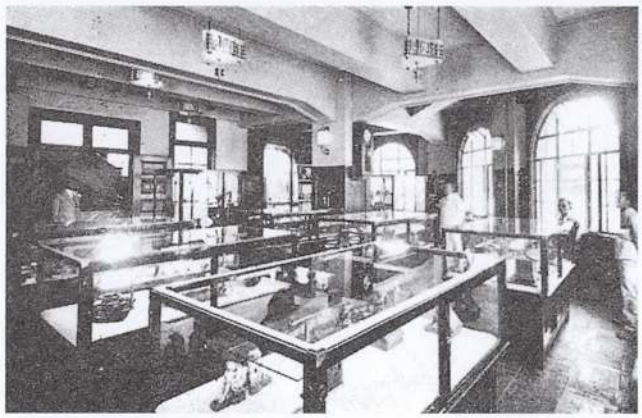
ところで、交差点に面した建物の正面は、パラペットの中央が一段高くなり、そこから下に向かって5階から3階までテラコッタの装飾列が配されている。鋳銅製の「生」の文字を飾るテラコッタと、その下にほぼ同形の8つのテラコッタが直線状に並ぶ。それぞれの図像の意味ははっきりとしないが、8つのうち最上段が炎のような文様、2・3段目は機械をイメージさせるモチーフに蝋燭や六稜星をあしらったものである。これが3回繰り返され、最下段には盾のような紋章と竣工年「1930」の文字がみえる。文様の機械は、秤やねじなどをイメージさせ、いずれも建物全体を覆うアール・デコの幾何学模様と相性がよい。当時の時計のデザインにもアール・デコが好んで採り入れられていたことから、ビルと商品のテイストの一致も面白い。また、各テラコッタの高さは、窓の高さ（3～5階は窓2段で1階分）とも対応しており、納まりがよい。

①外観（現在）

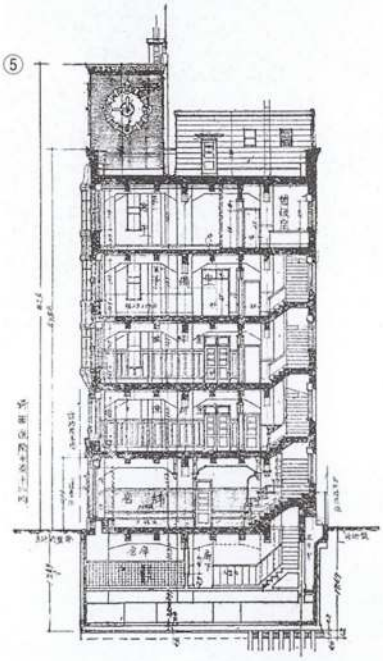
②

③

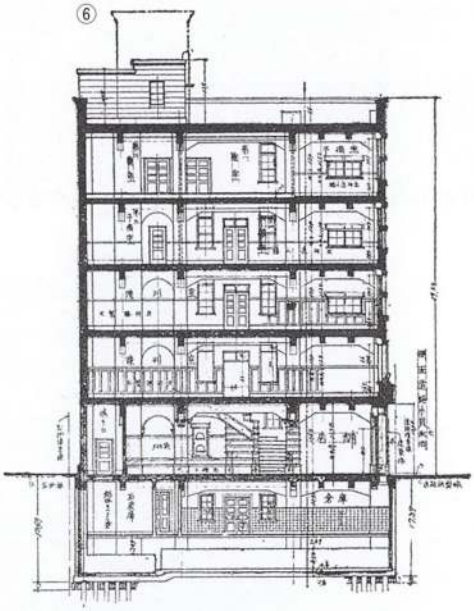
④



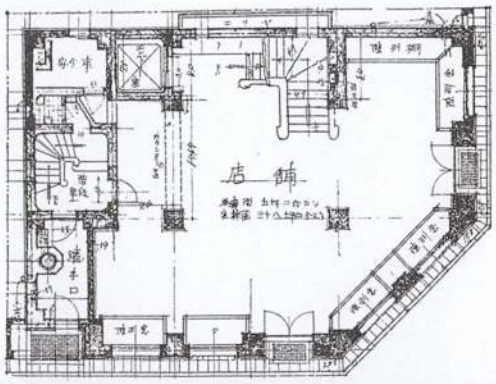
⑤



⑥

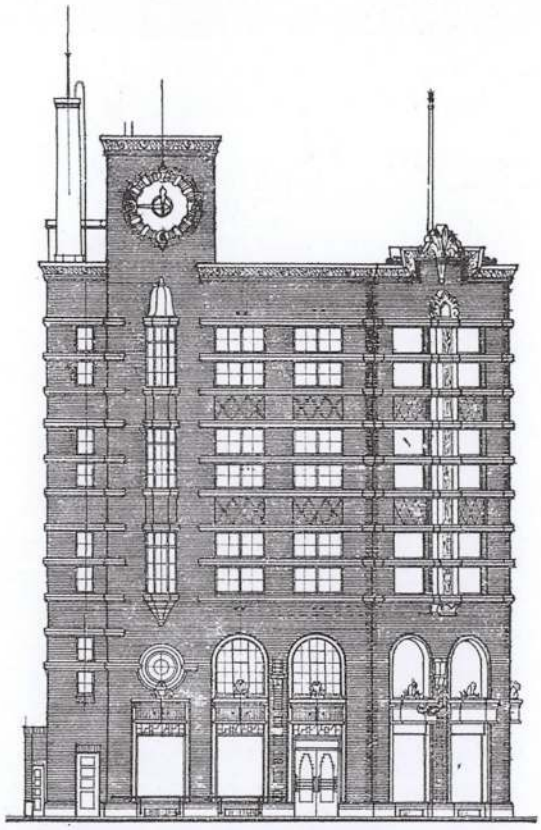


⑦



②外観　③1階陳列室
④2階陳列室　⑤横断面図
⑥縦断面図　⑦1階平面図
⑧正面図（堺筋側立面図）

⑧



「建築と社会」第13輯11号（昭和5年10月号）より

⑨外観テラコッタ（5階付近）

⑩外観テラコッタ（3・4階部分）

⑪屋上の時計塔（左）と階段室、平成14年に新設されたトップライト

⑫堺筋側からみたエントランス　左手がレセプション

⑬4階から5階へ至る主階段
天窓の新設により大変明るい

⑭1階北側の旧エレベータ扉付近

⑮施主・生駒権七のイニシャル入り
1階のステインドグラス

ところで、時計塔の役割を果たす塔屋は、ここが時計店であることからもっとも目立たせるべき存在だが、建物全体の中で南東部にあり、正面からみると左手となる。だが、時計塔の存在で建物自体が引き締まった印象となっている。塔屋の下には、3階から5階まで縦長の出窓が伸びる。2階には円窓があり、これらの縦長出窓と円窓で、時計の振子をあらわしているという。図像としての分かりやすさ、親しみやすさも、このビルの人気の一因であろう。

ファサードは一面、当時大流行したスクラッチタイル貼り。しかし、一口にスクラッチタイルといっても、そこにはさまざまなバリエーションがあった。

生駒ビルヂングのスクラッチタイルは、表面のスクラッチの幅が広く、あばれた感じが強調されている。また、釉薬が施されているために光沢感がある。ファサード全体を覆った感じとしては、各タイルの持つ光沢感がビル全体を包み込み、さながら施釉陶器のような味わいを醸し出している。

このほか、大阪市内の現存する近代建築では、大林組旧本店、旧第四師団司令部庁舎、天満屋ビル、商船三井築港ビルなどがスクラッチタイル貼りであるが、それぞれのスクラッチタイルの表情が少しずつ異なる。生駒ビルヂングのそれは、表面の大きな凸凹と釉薬の輝きに抜きんでた存在感がある。

以上のように、生駒ビルヂングの外観表現は、当時の時代相と消費者の嗜好を敏感に反映するとともに、デザインに対応した素材選定にも細心の注意が払われていたことがうかがえる。

■狭いフロアを美しく

平面図や「新築工事概要」によれば、地階は倉庫等、1階は主に営業室(陳列室)、2・3階は陳列室、4・5階は事務室とある。1～5階は53.33坪（176㎡）で、各階ともエレベータ1機、階段2ヵ所、倉庫または便所があるから、営業室・陳列室はそれほど広いとはいえない。竣工写真には、ところ狭しと陳列ケースが並べられていた様子が写る。しかし、この建物が今日まで大切に残されてきたのには、こうした使用状況にも負けないだけの、建築として、デザインとしての強さがあったからだろう。関東大震災の教訓を生かした過剰ともいえる大梁・小梁の強固な構造はもちろん、外観に負けないアール・デコのデザインも一貫している。

内部の見どころの第一は、2ヵ所の階段室である。主階段は堺筋側の店舗入口をはいると正面にみえる。入口は堺筋側（東側）のほかに平野町通側（北側）にもあった。江戸時代以来のまちの正面は平野町側だったが、ここでは階段との位置関係から拡幅された堺筋が正面であったことがうかがえる。さて、堺筋側からはいると、階段と同じく段々状になった手摺のデザインと、大理石の質感が目に飛び込んでくる。現在は、赤絨毯が階段に敷かれている。竣工写真では色までは判然としないが、おそらく現在とそう違わない雰囲気であっただろう。大きな違いは、階段踊り場のステインドグラスが、当時はなかったことくらいであろうか。狭い平面を有効に使えるよう、「コ」の字形に階段が配されている。

もうひとつの階段は、南側裏手に位置する勾配も急なものであるが、手摺や段裏の曲面表現などは見事である。裏側でありながら手を抜かない姿勢が読みとれる。

階段とならんでデザインのモチーフとなったのが、垂直に伸びるビルの顔であるエレベータであった。竣工時のエレベータは、1階は北側、2・3階は東側と扉の位置が階によって異なっていた。現在は東側の扉に統一されているが、1階北面には竣工当時の名残をみせる文字板などが健在である。

1階内部の壁面は、二丁掛の施釉タイル貼りで、目地は金泥仕上げであり、大理石部分とも調和している。外装のスクラッチタイルとは一味違った魅力がある。また、照明器具はビル全体のアール・デコの雰囲気を継承している。

このように、細部にいたるまでデザインに気が使われ、外観の印象とたがうことがなかった。

■コンシェルジュオフィスとしての再生

今日でも、竣工時と見劣りしないほど見事な外観・内装を呈しているのは、このビルが定期的に補修を受けてきたからだろう。昭和57年にエレベータの交換、翌年に外壁のテラコッタとスクラッチタイルの補修が行われた。

さらに大きな改修が行われたのは平成14～15年のことである。Y's建築設計室（現・Y's design建築設計室）によるこの時の改修は、建物の性格を根本的に変えるものとなった。生駒時計店としての用途から、オフィスへの大々的な転換である。近年、リノベーションやコンバージョンが盛んであるが、生駒ビルヂングの例は比較的早い成功例であろう。

「コンシェルジュオフィス北浜T4B」として生まれ変わったこのビルは、その名のとおりホテルのコンシェルジュのようなサービスを提供し、個人の起業家や企業の大阪オフィスとして利用されている。内部はわずか2.02坪から6.68坪までの小部屋に分割され、それぞれ1～5名程度の利用を想定してレンタルされている。こうしたサービスの中核を担うのが1階のレセプション（総合受付）である。電話の取り次ぎ、来客応対などにより、少人数の企業でも顧客や訪問者に十分対応できるサービスを提供している。デザインの上でも、レセプションの設えはアクリルチューブを用いた斬新なものとなった。

しかし、こうした改修は歴史的建造物の価値を損ねてしまうのではないか、という問いと常に隣り合わせにある。

しかし、ビルオーナーである生駒伸夫氏の意思はしっかりしたもので、歴史的な価値を損なうことなく機能を付加・向上し、新しいビジネススタイルに対応しようとするものだった。結果、堺筋側から正面階段にいたる動線と視線は十分守られ、アール・デコを基調とする歴史的な内装もほぼ昔の面影をとどめている。もっとも、天井の照明器具が1階で新たに装飾物としての役割を与えられたり、欄間が1階ウェイティング・ルームを飾ったりと、用途や配置は微妙に変えているが、当初の意匠・素材はできる限り尊重されている。使われなくなった一部の装飾部材は、オーナーによって大切に保管されている。階段室のステインドグラスが現在位置になったのも、実はこの時である。本来は東面・東北面・北面にあったショーケースの欄間として用いられていたものが、90度向きを変えて階段室の踊り場の窓におさまった。言われなければ気付かないほどに、現在の空間と調和している。

船場を中心とする個人オーナーの比較的小さなビルが、大阪の近代建築の特徴を築いている面がある。それは、オーナーの個性が建築に反映されているためで、建築家を選ぶ際も、個性の表現は大きな規準になったと思われる。設計者の宗建築事務所は、生駒ビルヂングの学区であった集英小学校・校舎の設計者でもあった。建築家と地域の関係を考える上でも、面白い事例であろう。そして、ビルの改修にあたっても、オーナーの果たした役割は大きい。歴史的建造物の継承を考える上でも、ビルとオーナーの関係は無視できないものであろう。

（さかい　かずみつ／大阪歴史博物館学芸員）